

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第一六号）

慈

光

第十卷

第十一號

目

次

狂乱して所為多きが如し……………	池山栄吉……………(1)
歎異鈔と池山先生……………	花田正夫……………(6)
池山先生を憶ふ……………	渡辺範介……………(8)
先師の思出……………	北岡行男……………(12)
正信偈私解(七)……………	白井成允……………(14)
信仰談話会質疑応答録……………	近角常観……………(18)

狂乱して所為多きが如し

池 山 栄 吉

本誌前号に、父と子と題して、我子のために子守唄を歌ふ父なる人の姿に示唆された信的感情を述べたが、今回はなほもすこしその話を続けて見たい。

常不輕菩薩ぢやないが、愛し子を抱いて、子守唄を歌ふ父の姿に跪拜せしめられたわたしは、うちつけに、父王殺害の悔苦から救はれた阿闍世王が、教主世尊の慈恩を讃へた言葉に想到する

『如来一切のために常に慈父母となり給へり。』

まさに知るべし諸の衆生は皆これ如来の子なり。

世尊大慈悲、衆のために苦行を修し給ふこと、

人の鬼魅に狂はされて、狂乱して所為多きが如し』

はたから見たらをかしいと思はれるかもしれない恥も外聞もいとつて居られないで、子守唄に専念する父の姿は、一切衆生の慈父母として、ものぐるほしいばかり苦勞してや

まない如夷矜哀の大悲を、端的に象徴化したものではあるまいか。

かう書いてきて、ゆくりなくも思ひ浮ぶのは、聖人が『教行信証』の終りと、『信巻』の序に

『これによりて真宗の證を鈔し、浄土の要をひろふ。ただ仏恩の深きことを思うて人倫の嘲をはず』

『ここに愚禿の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家、釈家の宗義を披閲し、広く三經の光沢を蒙りて、特に一心の華文を開き、しばらく疑問を至して遂に明証を出す。誠に仏恩の深重なるを念じて人倫の哂言を恥ぢず』

としるされた御文と『歎異鈔』の筆者が、同じく筆を擱くに當つて

『これさらにわたくしの言葉にあらずと雖も、経釈のゆ

くちをもしらず、法文の浅深を心得わたることもさふらはねば、定めてをかきしきことにてこそさふらはめども、故親鸞聖人の仰せごとさふらひしおもむきを百分が一、かたはしばかりをも思ひいでまゐらせて書きつけさふらふなり云々』と書き添へた言葉である。

一体これとあれと、といふのは、一方、前掲の聖人、並に『歎異鈔』筆者の述懐の文と、他方、さきに引用した阿闍世の仏徳讃歎の偈と、どういふ関係があつて、斯くは連想を喚び起すのであらう。

一寸見たところでは、さつぱり縁のなささうな両者の内容が、救済に没頭して、世間の毀譽を顧みるにいとまがないといふ点に一致してゐるからであらう。

さうと氣附いて、更に考一考して見ると、そも『教行信証』を著し『歎異鈔』を書くといふのが、要するに信への手引、とりもなほさず、安らかな眠へ引入れようための子守唄をものするの一般であるから、つまるところどれもこれも『子守唄につながる父と子』の象徴の中に統まつてしまふのは、蓋し怪むに足らないのであらう。

私は前回に所感を述べた中に『子守唄の父と子に就いて

言へることは、類推的に仏と人に就いても言へる。従つて経論聖教の多くは、子守唄の父と子の、どこかに納まるといつていゝ位、子守唄に結ばれた父と子の心象は、広く且深いものである。』と言つた。今回は私自ら、先づ醜より始めよで、聊かその納まり工合を試みて見ようと思ふ。

それにつけて、先づ、子供を誘ひ入れる眠は、安らかに、即ち、さとり、もしくは信心と決めて置く。

すると父は、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願、即ち、本願であり、二河白道の西岸上に喚ばはる人、即ち如来である。ひいては白道を行くべき決定を勧める東岸の人、即ち、釈尊であり、下つては七高祖であり、『如来の教法をわれも信じ、人にも教へ聞かしむる』祖師聖人であり、『阿弥陀仏に帰命せよといへる使』善知識である。更におしひろめては、普く信心の行者、念仏者一般をも含むと見てさしつかへはない。

さて父が本願、或は如来、乃至念仏者であるとする、その一切の所為は、他の合力を容さない、自給自足の絶体他力の運為、所謂如来廻向であり、また多少の語弊があるかもしれないが、一種の間接廻向とも見られる『歎異鈔』第四章にいふところの「未とほりたる大慈悲心」の発動で

もあり得る。

ところでその一切の所為、廻向の目的、動機とも見るべきは『歎異鈔』第三章の言をかりていへば「煩惱具足のわれらは、いつれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のため」であつて、その目指された悪人、煩惱具足の凡夫を象徴するのが抱かれた子供。

そしてその子供と父との間の心血の脉絡、通路が子守唄すなはち念仏と見られるのである。

斯ういふ風に観てくると、父と子と子守唄、即ち、如来と衆生と念仏と、三者別々に対立してゐるもののやうであるが、その実、父と子の心血が、子守唄を通して交互に流通するのが、撰取に約束された必然である以上、三つながら不可分の渾一体をなしてゐる。

もつとも信前にあつては「久遠このかた子ゆゑの廻向、わたし一人をかつた思ひ」で、父から子への働きかけが一方的で、子からの感応を缺く未完成状態の憾みがあるが、信後にあつては、親子互に呼び交はし、智慧のうしほに一味なる境界が展開して、所謂「本願や名号、名号や本願。本願や行者、行者や本願」の三位一体的、相關の關係にあ

る。一を離れて他を考へることは全然不可能である。

子守唄の父と子の寓意を、現実の事例に引直して、明瞭的確に見せてくれるのが、『歎異鈔』第二章、聖人告白の御文である。

『親鸞におきては、たゞ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり』

それ見給へ！ここには『親鸞』がある。『ただ念仏』がある。『よきひと』がある、そして『信ずる』がある。信完成への要因が不足なくそなはつてゐる。

言ふまでもなく『親鸞』は抱かれた子で『ただ念仏して』は子守唄。『弥陀』は父。『よきひと』は弥陀の代表。『信ずる』とは今將に眠に集中しようとする子の意向である。

金銀珠玉の法文を、手当り次第掘り出して、子守唄の陳列棚に飾りつけようものと、僅か一鉢二鉢あてたかと思つたら、忽ちに於いて、これはまた何んたる豊富な、鉅脈ではない、法脉に堀り当てたものだらう。この法脉の埋蔵量は無尽蔵である。

なぜかといふと、聖人の告白は、外に聖人直々の宗教体

験、信的歷程の記録であると同時に、内に真宗の基礎的原理としての教行信証を蔵してゐるからである。けだし、『ただ念仏して』は行。『弥陀にたすけられ』は証。『よきひとの仰せ』は教。『信ずるほかに別の仔細なきなり』はそのまゝ信である。

『歎異鈔』第十二章に「他力真実の旨をあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏を申さば仏になる、そのほかなにの学問かは往生の要なるべきや」とある。これは『歎異鈔』の筆者が、経論聖教の神髓を剔抉したものであるが、これも亦分けると教行信証の四つになる。即ち「他力真実の旨をあかせるもろもろの聖教」が教。『本願を信じ』が信。『念仏申さば』が行。『仏になる』が証である。

斯ういふやうなわけで、すでに経論、聖教の主成分、教行信証が一つ残らず第二章の聖人告白の中に具はり、その告白の事実を象徴化したものが、子守唄の父と子の姿であるとする、その姿のうちに、一切の経論、聖教がおさめられて了ふことはいふまでもないことで、一々の文句を探り出して、此処彼処へあてはめる労を取るまでもないことになる。実は今度筆を取り始めた時は、広くいろ／＼の聖教を読んで、恰好の文句をひろつて、父子心象の要所々々にうめて見ようと思つたが、今の様に考へて来ると、わ

ざ／＼そんなことを企てるのも余計のことであるかに思はれる。が、まあ兎に角、せめて範圍を『歎異鈔』だけに限りて、二三の採集を試みることにする。

第二章の聖人の告白が、子守唄の父と子の現実化に外ならぬとすると、聖人が自己入信の極速を回顧瞑想して、当時の心の推移を跡づけたものと見られる第一章。

『弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんと思ひ立つところのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり云々』

とあるのも、徒らに憶うけてゐた子が、いつの間にか泌々と唄に聞きとれて、寝るほど樂はなかりけりと、やう／＼に自覚の催される端的の叙述であり、その「念仏申さんと思ひ立つところ」こそは、第九章の「煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」としられた諦忍に外ならず。

又その「煩惱具足の凡夫云々」とあるのは、とりもなほさず、第三章全体、特に「煩惱具足のわれらは、いつれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐み給ひて、願を起したまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」と一つことで

あり、而してその悪人成仏の『願をおこしたまふ本意』こそは、第九章の目ぬき『しかるに仏かねてしろしめして』の父の洞見である

はれやれかうあげつらつてくると、足曳の山鳥の尾のしだり尾の、はてしもない長談義……下手にきまつた長談義に陥るおそれが多々あるから、もういゝ加減に切上げて、一と先づ締括をつけて置かずばなるまい。

ところでその決算の役割は、憚りながら聖人の御持言を煩はすことにしよう。

上來引用した『歎異鈔』の諸種の御文——それから若し長談義を続けるであらうならば、もつと／＼引用するであらうところの御文——を挙げて、皆悉く内に蔵する根本的諦忍とうかがはれるのが聖人の御持言、『歎異鈔』末章に『弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんと思し召したちける本願のかたじけなさよ』

とある御述懐である。試みに上に引用された一々の文を、この御持言と対照して見るがいゝ。どの文もこの文も、御持言の中に吸収されて余すところなきを感じするであらうところで斯くすべての引文——父と子に引当てた——を

吸収する御持言が、他面父と子の心象に、全面的にあてはまることは、論理の上からも必定であるし、また事実そうあるのに不思議はない、もつともこの御持言は、聖人入信の刹那、心内面に滲み出た文字、つまり第二章の『信ずるはかに別の仔細なきなり』とある、その信内容さながらの録音であつて、従つて第二章の聖人の告白とは言葉こそちがへ、こころは全く一つなのであるからである。

昭和十三年一月。聖鸞誌。

遺 詠 二 首

衆生かはいや 生死の海に
おのが罪から 浮き沈み
久遠このかた 子故の廻向
わたし一人を かたおもひ

「歎異鈔」と池山先生

花 田 正 夫

池山先生にお会いしようと思へば、『歎異鈔』といふ山を訪へばよい。その山の何処かに、何時でも逍遙して居られる。だから鈔の何処からでも「先生」とお呼びすれば「ウン、ここだよ」と、お念仏申されながら、すぐに温容をあらはして下さる。

人法不二とよく言ふが、先生と『歎異鈔』とは、一つに渾然としてとろけて居られた。『歎異鈔』の中に先生が居られるのか、先生の内に『歎異鈔』が生きてゐるのか、とも角も先生の露の生命に宿る不滅の月影が『歎異鈔』であつた。

それもそのはづ、先生の誕生は二度である。最初に誕生された生命は四十二才に命終され、「親鸞におきてはただ念仏して」の『歎異鈔』の一句に即生、すなはち再誕生され、爾来、お念仏一つが先生の本来の生命となられたのであ

る。

かくて、『歎異鈔』の「ただ念仏して」の一句に心眼のひらかれた先生は

「ただ念仏して、とは、よき人の仰せのきはみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくのてでもある」

と常に讃仰せられ、先生の御生涯を通じての、常持語もそこにあつた。或時にはまた、

「一体、念仏といふのは何か。それはよびかけである。救ひのために現はれた力が、目指すものへの呼かけである。私は言ふ。ここで救ひといふのは徹底的の救、未通りたる大慈悲の発動による人格の無上完成といふ意味である。その救ひを目的として、これが実現せんがために現はれた力が、目指すもの即ち、私達へよびかける声が念仏である」

と仰言つて、「弥陀廻向の番号」の真意を明らかにせられたことがある。

私は最近特に「ただ念仏して」の一句は、如来廻向の念仏である、他なる力、仏智不思議の建現であるといふことを強く感佩せしめられて居る。

それは最高価値の念仏の光が消えて、絶対価値の念仏の発現である。それは、諸善万行の一切が、我機すべて及び難しと知らされた行者に、唯一最高の道として、念仏称名が残り、そこにしがみつくと云ふ風になり易いのであるが、その最後に残つた、念仏の一行だに及び難しと知らされたところ、万策ここにつぎるのである。自力作善としての念仏、罪福信の念仏が崩れ去るのである。斯くて、聞いた読んだ、解つた、称へた、等々の一切のはからいが、きれいに拭き取られるところに、この者を、仏かねてしろしめして、ことに憐れまれての、救ひのために現はれた力のよびかけ、ただ念仏の太陽が、夜の闇黒を破つて下さるのである。近角先生は、この念仏を、「重病人を救ふためのお粥の念仏」とも「乱暴者の汗かき、どんな着物をも駄目にする者への親の作つた手織の着物」であると、懇切丁寧に御教へ下さつてゐる。更に又「姥捨山の子故の枝折り」に譬へられて、仏智の不思議、広大なる御真実を御説き下さつ

たのである。この近角先生の御提撕によつて、何物も消化し得ない重病人、どんな着物も駄目にして丁度乱暴者、と知らされ、更に、親を捨て、省みぬ不孝者のための枝折りとしての、親からお廻向下さる念仏が愈々仰がれるのである。

ことに、先生の臨終を前にされて、愛子さんに、

「お前はお父さんさへ居れば満足であつた。然し今度といふ今度は生きてやれなくなつた。唯念仏しておくれ」と遺言され、更に亦、愛子さんに、

「南無阿弥陀仏を言へ」と書きとらせられ、

「南無阿弥陀仏アイコ」と先生が書き添へられた。

これが絶筆となり、御逝去の数日前にかすれる御声で「何も残るものはない。何も残るものはない。」

ただ念仏だけが残つてくれる。ただ念仏だけが残つてくれる。偉いこつたよ、有難いこつたよ」

と、お顔を綻ばせられて、とぎれ／＼に申されたのが、まとまつたお言葉の出た最後であつた。それからのは「あゝあゝ可哀さうに、南無阿弥陀仏」

を繰り返されつゝ、曇鸞大師の往生の年、六十有七の御生涯を洛北蓮華谷で念仏の息絶え終られたのであつた。

池山先生を憶ふ

——(昭和十四年十一月稿)——

渡 辺 範 介

池山先生の御忌が眼の前に迫つて来た。さうでなくても世は既に秋である。仲秋の名月が夜毎に缺けて行く。垣根にすだく虫の音も絶え／＼である。心ない私でも物思ふ時である。まして先生の一周忌を迎へんとして、大恩うけた先生を偲ばざるを得ない。

私は近年お念仏を称へる時、妙に先生の佛を彷彿する。それはお内仏の傍に先生から戴いた「一心正念直来」やら「親鸞におきてはたゞ念仏して」の掛軸が掛つてゐるからでもあらうが、そればかりでもあるまい。私のお念仏は先生に培はれ、先生に育てられたのであるから、お念仏と一緒に先生の面影が浮び出るのは当然であらう。

「一人ゐて喜ばば二人と思ふべし……」

と祖師は云はれたが、不品の私はまつ縁の近い先生を想ひ出す。私の先生に師事する事は長かつた。学校では六高時

代の二年間であつたが、道の上の師匠として仰いだことは実に三十幾年の長きに亘つてゐる。その間先生のお側に侍して親しく訓を受けたことは数え切れない程度々であつた。従つて眼を閉ぢて先生を想ふと、フィルムの連続写真を見るやうに、次から次へと懐しい先生のお姿が頭の中を去来する。歯切れのいい江戸つ子訛の話しまでが、耳の底に響いてくるやうに思はれる。

私の六高時代の先生はまだ三十幾歳の少壮教授、お年齢の割に老成されてはゐたが、至つて元氣もよく、他の教授達とテニスをして居られることさへあつた。先生のテニスタイルなどは晩年の先生のみに接した方々にはとても想像もつかぬ情景であらうと思ふ。

住吉の甲南高校時代は先生の初老期に当る。旧師に対する懐しさからお宅に度々伺つて教を受けた。同じクラスの

旧友達と先生を甲陽園や苦楽園に招じ、昔話に耽つたこともあつた。

先生が京都に移られてから先生との交渉が段々繁くなつた。主にお宅での御法話で御教化を頂いたのであるが、晩年先生が御健康を害されてから、医者として治療の御相談にもあづかつた。最後には御臨終にさへ侍ることが出来た。その都度、私は先生からどの位無言の訓を受けたか分らない。

斯様に先生と私の因縁は長くもあり深くもあつた。それだけに心に残る思出、眼に映る俤は、いろ／＼の年代、いろ／＼の機会に亘つて様々である。

その内、お念仏と共に私の頭に浮ぶ先生は、一昨々年の暮近く、芦屋の拙宅で催された御法筵での先生で、その折の先生ほど私に強い印象を残したものは無かつた。御病後のまだすつかり恢復し切らない御血色で、どことなく重々しげな足どりを、奥様のお伴で遠く芦屋までお運び下さつたことは、只々相すまぬとお詫びする外はない。

この日先生をお迎へして私と一緒に御教化を受けた者は、東条老先生、同僚中村さん、篤信な私の方の看護婦長と、その外には私の家族、身寄りの者はかりで、気のおけぬしんみりとした御法筵であつた。

灯園に走られた。併し一灯園では先生の悩みは医せらるべくもなかつた。そればかりか専心托鉢奉仕せらるる同人の精進ぶりを見て、老軀それに耐えなかつたり、これまでの生活習慣ですぐに下坐奉仕の托鉢に手を染めかねたりせらるる御自身を省みられては、真面目な御気性から自責の念にさへ驅られて、憩ひの家であるべき一灯園にむしろ圧迫をすら感じられる様であつた。

そこで私は一度池山先生のお話を聴いて頂いたならばと思つて、東条先生を蓮華谷のお宅にお伴をした。二度目もまたお宅に、三度目がこの日の拙宅での御法縁であつた。

修行、作善によつて仏に近づかうと励まれた先生には、『善もほしからず、悪もおそれず』とか『善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや……』とかの聖語は、初めは異なものを感じられたやうであつたが、池山先生の説かるる他力の妙趣をだん／＼と領解せられて、三度目のこの日「肩の凝りかもみほぐされて急に気が軽くなつた」と心から歎かれた程であつた。有難い限りである、私は後から合掌せずにはゐられなかつた。東条先生は必ずお念仏を称へて居られたに違ひない。

斯うして池山先生のお導きで東条先生は他力の法縁を結ばれたが、この世での御縁は極めて短かく、この事あつて一ヶ月と経たない、昭和十二年一月一日に急逝せられ、

お話は部屋に掛つてゐた福沢先生の額から始まつた。それには「未識自」と書かれてあつた。

「福沢先生ほどの碩学にしてこの嘆きがあるのか。私は勿体ないことだ」と。他力の信仰を頂かれた御自身の幸を心から悦ばれ、いろ／＼とお諭し下された。

又先生は一首の和歌を書いてお示しになつた。「今日、京都からの途すがらふと浮んだ即興である」と断られた。

人ならば八十路の坂もこへぬらし

梢まばらに 残るもみじ葉

と云う歌であつた。散るもみじ葉になぞらへて浮生なる人生の相を説き、一旦散つた紅葉が、また来む春を迎へるやうに、人も亦、未来に開ける春を持たねば淋しい。と云つた様な意味を信仰の上から有難くお話し下されました。

かういふ断片のお話は其の外にもあつたが、其日のお話の主流をなすものは『歎異抄』であつた。黒板代りに筆と紙を使はれて、○や△、聖語、聖句を書かれての御信味は、我々凡俗の心耳にも透徹して有難かつた。善悪を超越した絶対他力の親様の救済は、東条先生に殊に深い感銘を与へられたと見えて、後日、先生は「池山先生のお話で永年の肩の凝りが一時にもみほぐされた様な気がした」としみ／＼述懐せられた。

東条先生は晩年あることに苦惱せられて、道を求めて一

に惜しいことであつた。池山先生も「もう少し東条さんと一緒に悦ばして頂きたかつた」とひどく惜しまれた。

私がこの日の先生を何時にも増して有難く拝し忘れ難いものと思つてゐるのは、斯うした東条先生の御因縁にもよるが、私自身の心にも未だ曾てない大きな衝動を受けたからである。東条先生が一灯園に参じ始めた時、私も先生に勧められて、先生のお伴をした。はじめの内はさまで興味も覚えず、修養団でも見学してゐるやうな気もしたが、血の滲む様な真剣な一燈園の生活を見、天香師の崇高な人格と敬虔な態度に触れるにつれて、何時とはなしに私も黒い引つ張りを着、箒を持つ様になつた。

『いづれの行にても生死を離るることあることなき』

『雑業を捨て、一心一向に……』

と私も誨へられてゐるから、雑行雑善に執ることが、弥陀大悲の慈光を仰ぐ障礙となることは疑はないが、無一物、無所有、明日の糧さへ思ひ煩はず、身も心もすべてを捧げて、お光……如來……に任せ切つた一向な一燈園の姿相にすつかり魅せられて何となく一灯園が好きになつた。さうして絶対依憑のこの態度こそ他力の真実を体したものであるのかとさへ思つた。そしてまた、一灯園の托鉢——奉仕の諸行——が仮に雑毒虚仮の行であるとしても、たか

の知れた底下の凡夫の私のする業であればもとより本願を妨げる程の悪でもない筈。ただしかし、この托鉢行を善根功德と心得、これを何かの足しにしようなどと功利的な野心を持つた時には真の難行となる。さういふ野心がなく脚がしつかり本願の大地を離れず、せめてこれだけでもさして頂かねばと敬虔な気持からすれば報恩感謝の行とならないものでもあるまい。人は知らず少くとも私の様な凡愚は世諦成就のためには範を一灯園にとるに如かずと考へた。このことについては一度池山先生に教を乞うた事がある。先生は「それによからう落つれば同じ谷川の水であるうから」と仰せられた。まあ折角やつて見ろと言ふ意味だと解して、その後もつとめて一灯園に接近し、つとめて行願し、押んで不浄を清掃することにも参加した。

ところが、どういふものか行願托鉢にしつくりと落ちつかなかつた。手拭で頭を丸め、引つ張りの裾高々とからげ、素足庫裡下駄に馬穴を提げて、他家の門に合掌して立つた姿は、よそ目にこそ一角の托鉢者であつたが、当の本人は内心穏やかでなかつた。恥かしい、きまりが悪いなどいふ感じはまだしも、銜気、嬌慢、己惚、あらゆる妄念、妄執に驅られた。然しこれも私の道心の足らぬからだ、我と我心を励まし、この行を続けた。

さうするうちに先生のこの日の御教化に遭つた。先生の

歎異鈔のお話は、これまで幾度となくお聞きしたが、この日だけは全く始めて聞く新しい思ひがした。
『念仏は行者のために非行非善なり。……』
ここまで来ると、ふと私の行願姿が眼の前に浮んだ。我執と妄念に悩む心を、色あせた黒い引つ張りに包んで、拝めない心を強いて拝まうと力んだあさましい姿が！

願れば私はこれまで懺悔のための下坐行、大慈大悲の報恩行と己惚れて、ひたすら行願托鉢を励んでゐたが、真実のところ私はさうした謙虚な、随順な気持を持てなかつた。懺悔といふは、我身の罪惡煩惱を知り抜いた者の至情である。報恩といふはしかと何物かをいただいた者の心に溢れる感謝の念である。それなしに下坐行も、報恩行もあつたものではない。それを強いて行じようとする処に、我執も力み心も生れるのだ。私の行願が正にそれであつた。私が行願托鉢の聖行を奉行しながら、落着けず懊惱したのは私に真の懺悔もなし、真の報謝もなかつたからなのだ。つまり行願の魂、即ち念仏がなかつた。念仏のない行願は、実体のない影で、これ程たより無いものはあるまい。その頼りない影を追つてゐた私の浅聞しさをしみじみ愧かしく思ふ。

かう教へられて見るとこの日の先生の御法話は、この上

ない有難いものであつた。それとまた斯様に味はさして頂く機縁となつた一灯園の托鉢にも感謝せずにはゐられなかつた。引つ張りを着て馬穴を提げて不浄を拝んだればこそ先生のお話の心随が領解出来たのだ。私の様な下根の凡機には一灯園のやうな現実の生活体験を通さなければお念仏に直入することが出来ない。これも仏の善巧方便であらうが、よく／＼底下の凡夫、手数のかゝる愚か者である。只々仏様にあやまる外はない。

斯うしたわけで、この日の先生は、私の終生忘れ得ぬ有難い思ひ出となつた。お念仏と共に先生を彷彿するのはこの為であらう。
かういふ、他の人には何のことか解らない、たわごとみたやうなことを書きつゝ私に内省の機を恵んで下さつた先生の一周忌を衷心より追悼しつゝ感謝する。さうして何時までも／＼先生のお慈悲、御加護の下に生きる私をうれしく思ふ。
南無阿弥陀仏、々々々々。合掌。呼子鳥。

先師の思出

北岡行男

○ 岡山の六高で池山先生に独乙語を教つた。たまに授業をやめて、宗教味豊かな印度の昔の物語りをして下さることがあつた。その時の先生のお顔は熱をおびて輝き、私どもは深い感銘を覚えた。

○ 独乙語の作文を先生に提出して直していただいたことがある。折釘流の読み難い原稿を殆んど各行に渡つて朱筆を入れて丁寧に添削して下さいました。その行きとどいた御親切の深さに、仏の御慈悲もかくやと、恐縮感謝したことがあつた。

先生の御自宅で御年忌か何かあつて、花田君や、玉尾君と一緒に御招待を受けたことがあつた。心魂に沁み入るやうな御話の後、皿に盛つた浪花餅が出された。何から何までお心配りの深い御慈愛を今も勿体なく思ひ出す。

先生は玄人の域を摩した碁の打手であつた。たしか野沢竹朝七段に三目だつたと承つてゐる。

私は或日先生に井目を置いて打つていただいたことがある。中盤で紡糸で中押で負かされた。その時「筋は悪くないが力が弱いですね」と仰言つた。まことに冷汗ものだつたが、存分に先生に叩きのめしていただいたことは快い思出である。

○
甲南の御住居や、その後京都の蓮華谷のお宅を幾度となくお訪ねした。自分独りで、時には妻と同伴して。その都度、抱いていた煩悶や信仰上の疑問は、先生の慈顔愛語に接して、春雪のやうに消えてしまふのが常であつた。そして満ち足りた心で足も軽く辞去したものである。

○
ある時、俱会一処に就いてお尋ねしたことがある。

先生は「浄土で亡くなつた家内に会へると思ひますよ」と、如何にも実感の籠つた調子でおつしやつた。

○
先生の御逝去は、私が出征中で、大別山の戦斗最中であつた。御臨終にお目にかゝれなかつたのは千載の恨事である。

○
先生の御在世中、私は信仰に徹し得なかつた、隔靴搔痒の憾があつた。

先生がお浄土に帰られてから満十八年経つた一昨年の文化の日、洛西、浄住寺の榊原師のお宅で、先生の追悼会があつた時、奇しくも時節到来して、私の長夜の闇を破つていただいた。榊原師の暗示、花田法兄の示談、城君の縁が解発して私は異常なる体験、廻心を賜つたのであります。昔先生に蒔いていただいた種が、機縁熟して花開いたことと思ひ、遠く宿縁を慶ぶ次第であります。

○
そして御在世中、懈怠と横着を極めて、いつも先生にもどかしさの御思をおかけしましたが、今の私を御覧下さつて、喜んでゐて下さることとひとしほ感慨に堪えません。

○
現在、ほのゝと春潮のやうな情感が常に胸底にありまして、ただ念仏の一道をのどかに歩ませていただいで居りますのは、ひとへに池山先生のお蔭であります

正 信 偈 私 解

白 井 成 允

浄土真宗の教学に於いて三願三機三往生と称ばれる法門の義理が重大な問題であることは、私共その教学について学んだことの無い者にも、推測し得る。だから私は今之について学解をあげつらふ積りはない。ただ私なりに三願転入を信心の相として味はひ省みようと思ふのである。

先づ聖道的修諸功德の行を以て浄土に往生しようといふ念願が挫けて、称名念仏によりて往生を期しながら、猶その称名する自の心行に功德を認めようとする事、救ひを祈る心の清さを保ち、其の清さが仏に知られ嘉納せられるのだといふ思ひから離れることができない事、是れ上に述べた如く、彼の門を出でて真の門に入りたる相であり、自の修める諸善功德に頼らずして仏名に頼りつゝ而もその頼る自身の善さ清さの功を仏に廻向したむけんとする心を離れ得ないところに、矛盾が潜み破綻が起りて安らひ得ないのである。然し此は私共人間といふ者の永遠に免れ得ない心

相である。たとひ神々に祈るにしても、祈ること清らかならざる者の願ひを神如何にして聴き許すことがあらう。祈る者には、他の行者は如何にもあれ、祈る己れの心は清らかであり誠であると思ひ、この自己の清らかなる誠を神に汲み取つてもらひ、神の助けにあはうといふ切なる情が動かざるを得ない。凡そこちらの方に神にさゝげる何かの功德を具へずして、神如何にして此の者を助けようや。神の助けに値する何かの功を此方に持つてゐなければならぬのだ。是れまさしく祈りの心情、祈りの念仏の心情の中にまで潜む人間の我執の不断の思ひである。如来の悲願が真実であらせられるから之をいたゞくこちらの心も亦真実でなければならぬ。たとひ平生うか／＼と不真面目にすこす事が多いにしても、せめて念仏もうす時、法を聞く時にだけでも真面目にならねばならぬ。刹那も真面目になり得たなら其の刹那に如来の悲願真実心はいたゞかれるの

だ、然うでなければいたゞかれないに定まつてゐる。此のおもひはどうしても去り得ざるおもひである。

ところが是れまさしくこちらのおもひ、凡夫の妄想である。如来の眞実心は、私に向つて、汝眞面目に法を聴け、清く念仏せよ、然らば我が悲願がわかるだらう、信心がいたゞけるだらう、と言はれるのではない。寧ろ其とは逆に、汝はいかに眞面目にならうと勵んでも眞面目にはなれないのだ、汝はもともと不眞面目の者なのだ、その不眞面目をどうともする事が出来ないで三世に流転する、其の相が可哀さうで、だまつてゐることが出来ない、汝が眞面目になられる者ならば、だまつてゐてもをらうが、汝がどうしても不眞面目を脱し得ない性の者なのだから、我れは汝を憂ひて必ず救ふと誓つたのだ、汝が眞面目になり得ない性分であればこそ我れは汝を護りて離れないのだ、と是の如きが如来の悲願の叫びである。此の叫びを聞くと、如来の悲心は、こちらの善さ悪しさを問ひ審き分別してをられるのではない、こちらの徹頭徹尾あさましき者なるをみそなはし懲れみて之を御自身の責と感じて若不生者不取正覺と誓ひたまつたのであることが知られる。自分がどんなに努めてもとても眞面目になり得る者ではない、徹頭徹尾不眞面目な者なのであることが知られる。今まで久しく自分は不眞面目だからいけないのだ、眞面目になつて信を

私には然うとは思はない。寧ろ逆に罪業深重煩惱熾盛の汝なるが故に見捨てることができないのだ、といふ如来の至心を開く時、即ち今まで自ら氣のつかなくつた自分の姿に氣づかせていたゞく、自分の罪業の深重なる事、煩惱の熾盛なる事、其のどうすることもできない事に氣づかせて頂く。如来の至心の願力に乘らしめられながら、いつのまにか我執の角を用ひ、自力の計らひに陥りて、自ら迷ひ他を傷つけてゐる自分である事を見出だす。あゝしよう、かうしよう、あれがよい、これがよい、徒らに思ひ焦つて事を為す、為し終つた後でそれが根源的に過つてゐたのだと思ひつく。自力執心の修業に誇り、朝夕の仏前の礼拝に於いてさへも、如来の御恩を想ふこと稀にして己れの功德に慢る念のみ盛んである。読経をも己れの功となし、念仏をさへも己れの修める徳となす、煩惱盛んに燃えて止まざる私の心は恰かも第十九第二十の願に於いて如来の誓はせたまひしところそのまゝの心である。唯此の心に安らひ止まるのでなく、此の心をかねてしるしめしてそのまゝに懲れみ救ふと誓はせたまふ第十八至信心樂の願を聞かせて頂くところ始めて安らひ止まり得る。第十八の如来の至心の徹したまうた時に始めて第十九第二十の願の必然にまします所以の自心の相に醒めしめられる。則ち如来のおん誓願おん修行の久しく久しく私の上に注がれ来りし事に醒めしめ

獲るのだ、と思つてゐた事が身の程知らぬ驕慢懈怠の事であつたといふことが知られる。此の驕慢の者をかねてしるしめして救はんと誓ひたまひ、万徳を尊号に擬り固めて恵みつゝ呼びましたのである。こゝに如来の尊号を称へることは、如来がこの悪人を救はんが為に賜はつた至徳をいたゞくので、どうとも他に致し方が無いのである。然し如来の至徳をいたゞくといふ事は無始劫以來の初事で、今まで己れの無明煩惱を源として生死の境に流れ漂うてきた私の生命が、此を転機として、未来永劫に如来の至徳を源として生きてゆくようになることを意味する。之を本願に帰すると云ふ。是れ第十八至信心樂の願に安んずるので、まさしく仏法を聞く者にとつて今生人間として在り得る究竟の境に到つたのである。之を正定の聚に入ると云ふ。祖聖晩年の御消息に此の位を特に喜ばせたまつた事が窺はれる。(以上六月廿四日高槻病院にて)

是の如く如来の至心をいたゞきて念仏もうすやうになつた時即ち攝取不捨の利益にあづけしめ正定の聚に入らしめたまふ。是れ第十八願に心安らひ得た相である。ところで此処に私の心は、既に第十八願に安らひ得たのであるから、もう第二十願や第十九願に誓はせたまつたやうな心は起らないであらうか。若しこのやうな心が起るならば、其は未だ信心決定せざる故と云はるべきであらうか。

九
られるのである。第十八願を聞かしめられた上で第十九第二十の願に醒めしめられるので、如来の至心を開かざるどころに方便の願は方便と知られず、方便の願のかたじけなさ、即ち方便の願に適ふ懈怠の自己の機の相は眞信心樂の願を聞き得たところ始めて知られ、こゝに第十九第二十の願もすべて第十八願に摂め入れられるのである。第十八願に摂め入れられて茲に第二十の願を誓ひて御苦勞下された事が私の機の故であつたと知らしめられるのである。

覚えずくどくどしい叙述となつたが、私は之によりてかの寛喜の内省と称せられる事の意味を窺ひたく思つたのである。

恵信尼消息によれば、祖聖は建保二年四十二歳の御時、上野国のサヌキといふ処に於いて「げにげにしく三部経を千部よみて衆生利益のためにとて読み始めてありしを、これはなにごとぞ、自教人信難中転更難とて、自から信じ人を教へて信ぜしむる事まことの仏恩を報ひたてまつるものと信じながら、名号の外には何事の不足にて必ず経を読まんとするやと思ひかへして読まざりしこと」があられた。それは「サヌキと申す処にてよみはじめて四五日ばかりありて思ひかへしてよませ給はでヒタチへはおはしまして候しなり」と註されてゐる。此の事は、其の後十七年を経て祖聖五十九歳の御時はからずおもひおこされた事とし

て報ぜられてゐる。即ち

「善心の御房、寛喜三年四月十四日午の時ばかりより風邪心地すこしおほえて、その夕さより臥して大事におはしますに、腰膝もうたせず、てんせい看護人をも寄せず、たゞ音もせずして臥しておはしませば、御身をさぐれば暖かなること火の如し、頭をうたせ給ふ事ものめならず。さて臥して四日と申す曉。苦しきに、まはさてあらんと仰せらるれば、何事ぞ、諸事とかや申す事かと申せば、諸言にてもなし、臥して二日と申す日より大經を読むことひまもなし、たまたま眼をふさげば經の文字の一字ものこさずきららかにつぶさに見ゆる也、さてこれこそ心得ぬ事なれ、念仏の信心より外には何事か心にかゝるべきと思て、よく／＼案じてみれば、この十七八年がそのかみ、げにげにしく三部經……」を千部読まうと思つて読み始めたが四五日して思ひかへして止めたことがあつたが、その「読まざりしことの、さればなほもすこし残るところのありけるや、人の執心自力のしんはよくよく思慮あるべしと思ひなして後は、經読むことは止まりぬ。さて臥して四日と申す曉、まはさてあらんと申す也、と仰せられて、やがて汗たりにてよくならせ給て候し也、」と記されてある。

祖聖がサヌキに於いて衆生利益の爲に三部經千部読まうと思ひたゝれたといふ事、而して四五日たつて其の事が自

力の執に他ならぬことなるに思ひついて之を止められたといふ事、而も其の時の執念が十七年を経て後に猶熱の氣に臥してをられた際に不意に現れてきたといふ事、此等は何を語るものであらうか。之を以て祖聖が四十二歳の頃までも猶自力廻向の念仏に立つてをられた事而して真に他力の念仏即ち弘願の信に安らはれたのは五十九歳に於いてであられた事を示すものと解すべきであらうか。私には然う思はない。

私には、この恵信尼消息を窺ふと、先づ衆生利益のために經を読むといふ事が祖聖の比叡に在りてひたすら生死出づべき道を求めてあられた間に真摯に考へられ行はれた事であつたらうと思はれる。生死出づべき道を求める心は即ち発菩提心である、即ち願作仏心である、即ち度衆生心である。読經の功德を廻らして衆生に施さうといふ念の動くこと自然であらう。而もそれが根底から崩れて唯如来より賜はりたる念仏に在りて既に浄土の大菩提心が恵まれ、即ち三願転入して大悲の願力に安らひたまうた。是れ法然上人に会ひまいらせたまうた時の廻心の体験であられた。其の後は、如来の大悲の念仏に安らひたまふところに愈々強く仏の徳を体して衆生を生死の苦海より度脱せしめんとするの念願が動きたまうたであらう。殊に田舎の人々の愚痴極みなく流転測りなき有様に触れる毎に如何ばかりか痛ましく

彼等に同情し同悲したまうたであらう。その時若き日よりの深き宿習がおのづから湧き出で来りたまうたこと亦必然であらう歟。それは祖聖の求道の日からの深き宿習であられたであらう。それが後の日に時を得て暴露した、而も直

信仰談話會質疑応答録

近 角 常 觀

よくよく思ふなる あきとし也

ちに大悲の念仏に照らされ摂められて其の中に融け入つてしまつた、其の消息を告げてをられるものであらう歟。

(十月廿日開光庵にて)

(聞者一) 私は家父などの考へと私の考へと、濟まないが違ふことがあります。其場合、自分の考を通せば家父の意見を無にする事になり、さればとて自分が折れ、ば犠牲になつたやうで、

をかしな立場となり、いつも茲で私は行き詰る。夫れを露骨に父に話すと、父はいつも理屈を言はず、親の計らひに任せ、と言ひます、……。

(答) それはよく内容を承つて、申しても宜しいが、お父さんの信仰状態にもよると言ふものの、私はお父さんの言はるるやうに言うてよいと思ふ。その右にも行けず、左にも行けず、弥々行き詰る処に、最後の血路が有ると信ずることによいではありませぬか。自分は今のやうな逆境に

居る、前途の見込が無い。その行き詰る自分のために、見捨て給はざる広大の大悲がまします、と頂く処がそこあります。

(聞者一) イヤ、其処まで行けぬので私は困るのです。

(答) 其の行き当り、分る処までゆかなくてはいいませぬ

(聞者一) 事毎にそれでやつて居ります中に、或時はそれが分るやうでありますも、何うもはつきり分りませぬ。

(答) あなたは其処を未前に分らうとするから可かぬ。今私が、あなたの仰言る丈で言ひますと、我々がお慈悲頂い

た味ひから言ひますと、我々が人生の逆境に行き当り苦しむと言ふのも自分の方の計らひなれば、又あなたがこのお慈悲を頂かずに、親の言葉に聞いてやつて居れば、必ず行き当り困ると思はるるのも自分の計らひである。……

(聞者一) つまり私は何も分らぬのです。

(答) そうです。此方は何も分らぬ者なのです。其の分らぬ者故、遣る瀬なく思召して下さるが、仏の慈悲なのであります。此方は本来何も分らぬ者、……私など、自分も相当に人に善く出来るやうに思ひ、人も斯くしてくれるだらうと思つてゐるのでありますけれども、思ふ様に人も善くして呉れねば、自分も出来ぬ。出来ぬから苦しむ自分を、その仕て見やう無き有様をよく知ろし召し、其者を捨てぬとお慈悲が、仏の広大な御心であります。

それで一度このお慈悲に気がつき、夜が明けて有難いとなると、茲で飽くまでも捨てぬとお慈悲故、この度は此世のみならず、死後までもこれでやらせて貰へるのです。これが実に有難い。

こちらは死ぬのがこはい奴。其奴が遣る瀬なくお慈悲一つでこの人生を通して貰へるのであります。

「人生の事は何程のこととも無い、親のする事に任せて置

け」では、之を自力でやると「何とならうと人生は斯る処だから我慢して居れ」といふ事になる。而もそれで自分の意見が、少しでも折れるかといふに毫末も折れて居はせぬのである。

処が今仏の広大なお心を頂いて、その遣る瀬なく思召しに任かすといふは、何も苦しいところを我慢して通せとの心ではない。この遣る瀬なく思召しに安んずれば、動くべき時には、大に動かれる様になるのである。……

(聞者一) 先生は直ぐに其処に行かれるから宜きも、私など其処に行くのが甚だ遠いので……

(答) 夫れは、その遣る瀬なくお慈悲に夜が明けなくてはいかぬ。私ちやとて、何も始終心が「らく」である訳では無けれども、……否、時には大に苦しい時がある。でその苦しい処あるとすれば、それにちつと辛抱してより外は無。

此間も誰やらが、信仰など甚だ窮屈で困ると言はれた。現に本年一号の『求道』に告白を書かれた清水さんの奥さんが言はれた。

「お慈悲の無い前なら今の苦しみは無からうに、今では喜ばせて貰ふばかりに、仏にすまぬと思ふと欲する儘に行

けぬ」。これが人を相手に「欲する儘に行けぬ」ぢや無く、斯る者を哀れみ下さるお慈悲に対して、行けぬのである。信仰の味ひはこんなものであります。で先きに申した、「仏天の御計らひ」が時によると甚だ「らく」でない。私など「仏天の御計らひ」を言つた時は、一番苦しい時であつた。自分が信仰上より人の為にした事を、人は皆反対に取り、誰も信仰の事は耳に入れてくれぬ。自分が信仰上よりするだけ人が理解してくれぬ。そこで私「人に信仰を頂かさうなどとしたのが入らざる私の計らひであつた」と……特に思はせて貰つたのは、親鸞聖人が「仏天の御計らひ」を言はれた当時の東国の信仰上の乱れであります。殊に御一子善鸞大徳が、その間違ひをせられた事は、聖人にすれば如何にお辛かつたであらう。聖人にして見れば、念仏成仏は真宗、是れ一つを知らせんならんと、長々東国に於ける御苦勞であつたのに、肝腎の御一子善鸞大徳が、それをこはして走られたとは、如何にもお辛かつただらう、と思はせて頂いたのであります。してこれに対する聖人の御言葉が、前号講話に申す「仏天の御計らひ」といふ御言葉であつたのである。この仏天の御計らひに任せるといふ、任すことの出来るのは、まかすことの出来る偉大なる御力故に任すことが出来るのである。

此の間も誰かに申したのでありますが、私共が人に対

し、何か済まぬ事、喻へば借金でもして、これを先方にかけて断りを言はなければならぬとする。処が此方では取つたり措いたり、済むとかすまぬとか、種々に善し悪しの計らひを廻らして、先方に行くと、先方では、この事は自分の計らひに任せておけと言はるる。然しその親切は有難いが、夫れでは自分が済まぬと思ふと、どうしても向ふの言に従へぬ。処が先方は甚だ氣のよきことにて、突然自分の方にやつて来て、此方が済むすまぬと氣をもんで居る矢先きに、其事は忘れたるが如く、甚だ無邪氣に話して遊んで居らるる。それでも此方は其事が心にあるもの故、いらざる私の善し悪しの計らひを止めようと思つても止まらず、心が落ちつかぬ。ところが向うは此方のその思ひを察して「自分は実に君の心をよく知つて居る。君は屹度あの事を苦にして居るのだらう。君が自分のために、それ程に氣をもんで呉れる心は能く分つて居るが、併しあの事なら善きも悪しきも、自分の考へに任かして置いて呉れ。自分には実は君がそのやうに心配するのが氣の毒な故、先達もあの機な事を言つたのである。実は自分が今日も出て来たのも君が色々自分に対して氣に病んで居るのが氣の毒故、自分は何とも思つて居やせぬと、さりげなく自分の方から出かけて来た訳なのである。何も恩に着せる計りに出たのでない故に、自分のこの心も受けて呉れ」

と、これを言はれた時には、如何なる者でも

「あゝさうであつたか。夫れ程までに向ふは親切に考へて呉れるのであつたか。これに対し、彼是れ思つて居つたは、実に申訳なかつた」

となる。故に善し惡しの計らひの止むは、善し惡しの計らひをする此方の心を知り抜き、その心根を哀んで、飽迄その者に大悲をもつて向うて下さる遺る瀧なき仏の御心を頂かぬ事には駄目なのであります。

全体私は物事を非常に気にする性質である。その癖甚だ横着に暮して居るのでありますが、この間も或方に手紙を書くことを頼まれて、書かんならんと思つてゐても、何うしても書けぬ。心に甚だ相済まぬ事と思つて、顔を見てから言うには言ひ訳になる故、一寸人に伝言して「落さないがまだ書いて無い」と伝言して貰うた。さう言はれて見ると、其の方にして見れば「アゝ然うだつたかな」と、夫れだけである。

又人が、いつか自分の仕てやつた事をどう思つてゐるか知らんと氣を廻して、思つてゐる中は心は「らく」でないが、思ひきつて「君いつか斯ういふ事があつたが、あれを君はどう思つて居るか」と打出し「イヤあの事か、あれは君の親切を常に深く感謝してゐる」と言はれてみれば「アッ然

うだつたかい」と夫れ丈けである。

で、我々にこの善惡の計らひ心のある事を向ふの方より先きに知り抜いて、其者を見捨てゝ下さらぬお慈悲に夜が明けぬ事には苦しいのであります。

此の人生の生活上の苦しみも苦しいが、このお慈悲に夜が明けぬ苦しみも、中々苦しいのである。そこになると、かの生沼夫人であります。此の方は長らく茲にお出で下さる若い御婦人で、今春来鎌倉で病を養つてお出でになるのであります。此の頃、時々御伝言がある。この間も『歎異抄』の九章を大きな紙に書けとの御依頼で、それは以前に私の書いて差上げて置いた名号を形見として御長男に遣し、御次男にこの『歎異抄』の九章を遣し度いと御希望であつた。私は仮名は誠に下手で、生沼さんには恥しいのでありますけれども、先日書いて差上げて置いたやうの事でありました。それは生沼さんは御病氣で、自分は今死ぬかも知れぬ。死ぬと思ふと、九章に

仏かねて知ろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如き我等がためなりけりと知られて、いよゝたのもしくおぼゆるなり。

もうこの御一言である。先達小出さんがお見舞に行かれた時、病床より起き出で言はれたといふのも、このひと所で

「仏かねてしろしめして、といふ此の御言葉が無ければ」と言ひて、あとの言葉が続かず、ほろゝと泣いて喜ばれたといふのであります。

斯く仏かねて知ろし召して、初めより煩惱具足の凡夫と言つてゝ下さるお慈悲故、あなたももう心配する事は無いではないか。人に物を頼むに、相手が「よしゝ分つた」と言つて居るのに「イヤもう少し自分の言ふ事を聞いて呉れ」と念を押さなければならぬは、相手がまだ自分の心を本当に知らぬと思ふからなのである。

処が仏は善いも悪いも汝の心は皆知つて居る。知つたればこそ、其の汝を救ふために現はれた、汝を救ふための仏であると、仰言つて下さるのである。

しかるにみんなが、これ丈なら思ふ壺に持つて来い故、これだけで止めればよいのであるけれども、岐度何かこのあとに引つつけものをし、妙な処に船を着けようとするからいかぬのである。

設へば念仏を称へて病氣がよくなり長生きが仕度い、念仏を称へて心が「らく」になり度い、などと、自分の心を氣持よくするための念仏ならば、義なきを義とす処でなく、大いに義のある念仏である。

夫れ故、義なきを義とす、といふ事は、このお慈悲に夜

が明け、此方がすつかり取れ無くては其味ひが分らぬのであります。

処が又あなたが言はる事も一面無理で無い。今日一般には他力の偉大なるお力なる事を説かずして、唯他力に任せよゝと説いて居るのである。其本体の如何なるお力なる事を説かずして、唯他力に任せよゝと説いて居るのである。その本体の如何なるお力なるかを聞かずして、これに任せられぬと言はるるのに更に無理は無い。夫れ程までに知ろし召す広大のお慈悲なる事を言はずして、唯むやみに、手を放せゝといふ事ばかりを言ふのである。それで手は放すと墮ちるからこはい故放されぬ。

去りながら手足を放しても、確かり背後より抱えてゝ下さる広大な御力まします処に夜が明けた時には、何しに今迄頼りにならぬ物を後生大事とつかまえて居たかとなるのである。

併し凡夫の身は、一旦お慈悲に夜が明けさせて貰へたからとて、計らひがやむ訳では無けれども、信の上は結局はこの遺る瀧無き思召し一つに打任かせて其処が通らせて貰へるのである。實際になると苦しき中より無理々々大悲に引つ張られて其処を通らせて頂く位の有様であります。併しここをお慈悲に夜が明けずに無茶苦茶にやるのでは、我慢である、自暴である。云々。

編集後記

秋も肅々として過ぎて行きます。池山先生の第二十一回忌を記念して、洛北、浄住寺、御遺骨の御守りをして下さる榊原師の方丈で、例年の如く一道会が催されました。

十一月号の慈光誌も、先生の德音を中心に編集いたしました。御諒承願ひます。

○

△狂乱して云々の先生の御原稿を読むごとに、想ひ浮びますことは、大病がすこし御恢復なされた頃、

「日本中を歩き廻つても、聞いて貰ひたいことがあるが、然し、もう体力がない」

とポツリと言はれて、異様にひかる眼を窓外にむけられてゐた。私は早速「若しさうなりましたら、草鞋を持つてお伴いたしませうに！」と、申上げました。静もりかへる大湖の底にひらめく烈火を拝し、襟を正さしめられました。

△渡辺範介様、北岡行男様の先生の想

出には、現に香り実る先生の德音を誌して下さいました。私共学生の頃

「信仰の話をきくのは、筈に傷をつけるやうなものだ。その時はさほど感じなくても、筈が大きな竹と成長した時その跡もハッキリと大きく現れるやうに、若い時聞いた話が何かの機縁に、想ひ出されて来る。聞いても消えて無くなるといふことは無い。消えたと思ふのは、まだ心の底に残つてゐて、自覚的にならないまでだ」

と申されたことがあります。北岡、渡辺、の両氏の原稿にその実証が見られます。

△正信偈私偈は、白井先生の二ヶ月半の御入院の初め、痼か否か、大手術の前にされて、御家族への御遺文ともなるものをまで書き終へられて後、いよゝゝ大手術の直前まで書き続けて下さつたものであります。自照誌上でそのことを拝読し、御礼の言葉も見出せません、唯々有難く頂きました。

△質疑応答録は、対告主を持たれての近角先生の御法話とて、他に見られない妙趣をそこに発見せしめられます。御味読下さい。大正二年五月、求道十九卷第四号所載。

御案内

毎月第一、第二、第三日曜、午後一時半、一道会例会
市電、新郊通一丁目下車、

十一月廿九日、小桜町教西寺、報恩講、午前、午后。
(廿四日を本月に限り変更、)市電

御器所通下車、

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)

一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ二八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番